

## 諏訪本地『志奈乃、諏訪の神傳』について

白 石 一 美

## 序

『諏訪の本地』は、主人公甲賀三郎の名称の相違から諏訪系と兼家系に二分類せられ、更に兼家系は、その郷里即ち甲賀伊賀の別に二分類せられ、物語の結構は夫々に異なる。

小考は、これらの中、伊賀に属する物語の特性解明を微少ながら試みるものである。依拠した資料テキストを次に挙げる。

## 諏訪系

神道集（『神道大系 文学編一』所収 編纂代表 松下幸之助）  
天正本（一五八五年写 横山 重他校訂『室町時代物語集第二』  
及び松本隆信校注新潮日本古典集成『御伽草子集』所収）

## 兼家系甲賀本

大永本（一五二五年旧奥書繪卷二卷 宮崎大学紀要第54号所収）  
天文本（福田 晃他『伝承文学資料集1 神道物語集1』所収）  
天和本（一六八三年書写繪卷 宮崎大学紀要第56号・57号所収）  
兼家系伊賀本

『志奈乃、諏訪の神傳』（写本 影印・翻刻 古典資料21所収）

『諏訪明神縁起』（一六四六年写本一冊 縮小影印 同右所収）

『諏訪靈験記』（九州大学所蔵 岩松博史翻刻『文献探究』28）

なお、兼家系の引用本文は、大永天文天和三本を校合するに、三本は殆ど同文であり、僅かに偏差があるが長のある大永本を用い、九州大学所蔵本は耳遠い言葉を分かり易く改めるなどやや後出の新

しい伝本と判断されるので、伊賀本として前掲神傳を用いた。  
引用本文はかなを漢字に適宜改め、読点等を施した。なお文中の甲賀本・伊賀本は識別ゆえの仮称であり、固有伝本名ではない。

## 一 伊賀本の混淆本的性格について

伊賀本の結構は甲賀本に異なるが、素材に重なる面が多いことは否定できない。更に細かく点検するに、諏方系に通う面もあり、結論を前に述べれば、伊賀本は甲賀本と諏方系伝本との混淆本かと思う。以下、その一端を明らかにする。

1 伊賀本末尾に「業尽有情」云々の四句が存在し、これは諏訪本地の中、諏方系の末尾に見える。が、これを以て諏方系の影響下に伊賀本が成ったとは断言できない。これは、所謂鹿食免として成句化し、諏訪の絵詞にも見えるので、必ずしも確証とはなし難い。

2 穴底の姫が三郎の手に救われ、姫の本国に早々と帰る伊賀本の趣向は諏方系に通う。但し、諏方系は、姫が貞女両夫にまみえずと三郎の兄の要求を否定し、殺害直前、ゆかりの武士に救われ大和国に帰るとする。他方、伊賀本は、救出後、姫は兄をコケに化かし大和に帰るとする。危急と虚仮と細部は異なるが、趣向は共通する。ここに「早々と」とは三郎の帰郷以前の謂であり、甲賀本では、奇譚ながら姫は三郎の郷里甲賀に兄を虚仮に滞在し、三郎との再会后姫は大和に帰る。委細は後述（第五・七節）するが、甲賀本の滞

在の实在性に伊賀本編者が疑問を懐き、これを改めて諏方系に等しい物語前半の位置に繰上げ、早々と帰国させたものと考えられる。

3 姫に心を奪われた兄が、三郎を穴にこめて姫の横取りをたくらむ条、伊賀本は諏方系と甲賀本を折衷した形態である。即ち甲賀本では、太郎が次郎に提案し、次郎は兄上の仰せのままにと裏切りを了承するが、諏方系では、次郎が提案し、太郎は条理を説いてこれを否定し、次郎に別れて本國宇都宮に帰るとする。伊賀本では、太郎の提案を次郎が諫めると太郎は怒って綱切りの実行に及び、次郎はこれを見て涙する。後、コケが明白となり、姫に逃げられ、本妻も三郎も失った太郎が反省する条にも次郎はそれみたかとの口吻を示す。基本的には甲賀本の流れに拠りつつ諏方系の趣向を一部導入しているものと判断される。

4 読みがやや細くなるが、次は姫と三郎の初対面の場、即ち穴底における姫の言葉である。

まことに鬼王人間を取りてゑじきにせんと鬼満国よりいで、我  
國に越ゑはんべれども宝をば鬼満国にとゞめたる間さぶらはず、  
さては鬼王はや滅びぬるこそ嬉しけれ

要するに前文では鬼は宝ゆえに不在と言ひ、後文では鬼の滅亡を知り嬉しく思ひ、矛盾気味であり、これも折衷かと思われる。即ち前文の趣向に通うのは諏方系であり、姫が淋しがるので姫の慰め相手となる女を盗むため鬼は異國に渡つて今は不在と言ひ、鬼のいぬ間に姫を救出すると記す。後文は甲賀本により、姑息な救出方法をとらず、魔物と対決し、これを倒したことに因むのである。

以上、若干例を挙げ、兼家系の一異本たる伊賀本の背後における諏方系の存在を指摘した。以下、伊賀本の混淆本的性格を前提として、概ね物語展開に即して論述を進めたい。

## 二 主人公の父兼高の来歴と兄弟の諸国めぐり

伊賀本冒頭部に「当国信濃国諏訪大明神の御事を」云々とある。当国は、信濃国と同義の言い換え・繰返し、簡潔には当信濃国とも一応解せられる。が、物語の後半、仏事が伊賀国で開催される条に「当国他國の人々」云々とあり、ここは明らかに伊賀ゆえ、用例の一貫性を前提とすれば、冒頭は「この伊賀国にも分祀され、祝われている信濃国諏訪」云々と解せられる。即ち伊賀を基礎に信濃を語る姿勢が伊賀本にあるかと思う。さて、続く条を次に引く。

抑彼明神の由来を尋ねうけ給るに、昔敏達天皇の御時、后を鬼王にとられ嘆かせ給ひけるに、百済國に渡つて鬼王をせたげ、后をとり返し参らせ、我朝に帰つて帝の見参に入、名を後代にあげ給ひしは、伊賀の國けてうの郡甲賀のこたんの大臣兼高と申人也（甲賀は近江國ゆえ伊賀云々は苦しい設定である）

甲賀本は、天竺の國王の姫を父大臣が犯したとの讒に國を追われて日本に渡り、ぬし無き地近江國甲賀郡に住み着いたとする。

武勇の士と国外追放の浪人と、事蹟は表裏反して一であるが、女に鬼がつくと覺しき古い記憶は、物語の変容は別に保っている。

次にけてうなる郡名は、伊賀四郡中に無く、仮託であろう。兼高の肩書は「伊賀の國甲賀の三郎兼家と申者也」同様苦しい。聴衆に定着した甲賀三郎なる名を伊賀導入後も扨拭し得なかつたため、かかる苦しい設定となつたかと思う。なお大臣は甲賀本に見える。

父は三人の子に「同じ子なれ共二人は政道をとれり、三郎冠者は弟なれ共、政道かしくして、末の大將になるべき者なれば、三の宝をば三郎に譲る」と役割分担などを微妙ながら遺言して死ぬ。

かかる分担は甲賀本に無く、兄達は後に甲賀の山王社と現れたと記すが、伊賀本では、兄達は三郎を神に導いた善知識で、その所業は方便であり、兄達は伊賀国二所の宮と現れたと語り、兄に對する

次の三郎の言葉同様、相対的に兄達を擁護合理化する傾向が濃い。これは伊賀本の特徴である。伊賀本より次に引く。

怨み限り無し、よしこれも思へば太郎殿とがに非ず、我身前世の業因こそ悲しけれとて、身を恨みてぞ泣かれける

父の没後、(新たな狩漁)記事あり、折衷的増補と思われる、この記事は諏方系の狩よりも後、甲賀本よりも前に位置し、漁りのみ独自異文) 太郎が父同様の魔物退治を提案し、諸国の山々を巡るが魔物はいない。目的を遂げず帰郷すれば嘲笑をかうと太郎が怒るが立腹をおさめて御帰り候へ、三郎の船で海の魔物を尋ねようと言うと、さらばと帰国する。立腹の場が不明である。甲賀本では、信濃国黒姫山において「虚言した、領地をよこせ」と兄に責められて三郎が嘆くと黒姫の翁が現れて若狭国高懸山こそ魔の山と教え、兄に報告し、勇んで若狭に赴くと高懸山の翁が現れて魔の山ゆえ早く去れと教える。水辺の独自増補をなす伊賀本の続く条を次に引く。

さらばとて我国に帰られける、さる程に尾張の熱田に参りて、(魔物の居場所を神に祈る。神は若狭の山を教えて消える。)

さらば三郎とて伊賀に帰り、三郎のみ熱田参詣と解すれば、熱田の三郎より伊賀へ報告する条が必要となる。が、それは無い。立腹の場は不明乍ら「さ有らば」皆伊賀に帰り、更めて熱田に参つたと解すべきかと思う。(以下、兄弟達、若狭国七日路の山に赴く)

尾張は信濃よりも伊賀に近く、伊賀より船で渡れば知多半島に着き熱田に至る。加えて信濃黒姫の翁の一文は別に述べたが抜差し可能な切継ぎ本文(類例 第八節 馬)であり、黒姫を削り熱田を置いたものであろう。七日路山中に住吉明神が三郎達に山の恐しさを教え、山に入るも去るも心次第と言う。住吉は甲賀本末尾に見える。

(熱田住吉の登場は『酒呑童子』の趣向に通うか)

甲賀本では、姫が黒姫・高懸両山の翁の正体は実は黒姫権現・山神と後に種を明かすが、直ちに熱田住吉の名を出すのは種明かし部

分の削除線上げ等の結果と思われ、本地物解体化の傾向がある。

なお、熱田住吉の登場には、神道集卷十『諏訪本地』とは別乍ら同集卷四第17・18話にも注意したい。夫々順に諏訪と熱田と、諏訪と住吉とが鬼の討伐に協力したと言ひ、三郎は退治した鬼の娘の腹に男子をもうけ、諏訪の最初の神官としたという。両話の素材を一部取寄せたかたちである。更に鬼の娘は諏訪本地における姫の鏡と関わるかと思う。姫即ち鏡とすれば、三郎は最終的に鏡を我物としたか否か疑問があるが、今、立ち入らない。

### 三 山中の通行者と二度の蘇生

伊賀本によれば、三郎達が若狭の山中に魔物を待っていると、

- ①何者かが「一昨日は鹿を十かしら取り」云々と語って通り過ぎ、
  - ②法師五六人引連れて御経を読んで通り、
  - ③齡十四五二三の稚兒十人ばかりが、まりを蹴って通り、
  - ④十七八廿ばかりの女房十二人が連れて法華経を読みつつ
- 夫々三郎達の前を通り過ぎて行ったという。

これらは甲賀本に無く、同じく魔物を待つに、突然、鹿が三十二三現われ、三十三人の人々はこれを射止め、続いて天変地異あり、空から魔物が現れ、太郎次郎を奪い、残る人々も死んだという。

魔物を待つに直ちに登場とする設定は単なる筋書きに墮す。①②③④や伊賀本に無い鹿は魔物登場までの繋ぎであろう。ただ、甲賀本の鹿登場は唐突であり、プロットを乱す。諏方系の冒頭に伊吹山の鹿狩の記事が見えるように、甲賀本の原拠本に既に鹿狩記事が存在し、編者がそれを魔物待ちのここに安易に移したものと私は考えているが、伊賀本の①は伝聞風に鹿の雰囲気のみ残し、三郎達に狩猟の殺傷をさせず、かつプロットを乱さぬ秀れた展開である。

伊賀本編者は僧侶の如き小鳥一つ殺さぬ人かと想像するが、鹿の

射止めと鹿の雰囲気とは、物語の流れの上で等しい位置にあり、伊賀本の結構はプロットの乱れの克服、換言すればその前提に甲賀本の形態が存在したことを示すものと考えられる。

③と④は年齢などを記すが、この類例が甲賀本中間部に見える。即ち十乃至十二三の童共が人蛇と三郎を苛み、彼が塚に隠れた処、十七八廿四五の女房十人許りが「あれが三郎殿の供養に子息小太郎殿が建てられた観音堂よ」と語りながら通りかかる条である。

この童共及び女房に対応する伊賀本の条であるが、そこには童共や女房の記事は無く、代わりに三郎の子息小二郎の発案になる父三十三年忌の仏事の開催計画が現れる。即ち、人に四恩といふ事あり云々と子息が長々しく発案し、母もこれに同意するが、ここは説教色の濃い条である。物語展開上の対応関係・観音堂の実際の造立の記事が見えぬ女房の伝聞が他方では実際の仏事開催（の伏線）となっている点・細部の数は異なるが前述の年齢など、これらを考え合わせると③④は甲賀本より抽出転用して、魔物待ちのこの条に繰上げたものと思う。また②の類例は甲賀観音堂の後方に大峰通りの御坊達十人許り云々と見える。即ち年齢や人数関係の事項を甲賀本の如きから抽出整理して②③④と羅列したものと思うのである。

伊賀本は、物語末部を削除整理して伊賀の御堂における仏事開催と説法（第十節後述）に重点を置く。その他の被削除部分の繰上げ転用例は今省略する。

伊賀本における三十二人の人々の二度の蘇生 三郎達が魔物を持つと、俄かに雲間より現れた大きな腕が兄二人を奪い取り、三十人の従者も一度に絶える。三郎が矢を射ると手応えがあった。三郎は死んだ三十二人を蘇生の宝物を用いて蘇らせる。射落とした物の跡を尋ねて岩屋に至ると、十七八歳の女が現われ、私は鬼王ではなく、此山の守護神さは姫云々と三郎をたぶらかす。この化物は正体を現わし、対決に及び、魔物がとんでかかる。「三十二人の人々二目と

も見たまはず。まろびふしてたちまちに消え入りけり」。魔物退治の後、三郎は人々を再び蘇生させる。即ち退治の直前と直後に蘇生させるが、甲賀本は直前の一度だけである。対決の際に、危険だと人々を後退させ、三郎が前面に現われ、以後、三十人の従者（物語的機能は鹿狩の要員のみ）は甲賀本より完全に姿を消す。

二度の蘇生が（殊に聴取ならぬ読書上に）成功か否かは別に、従者を消さずに残した伊賀本編者の意図は、郷里に残る三郎の妻子への連絡役とし、主従道德の語り内容を盛り、以て庶民教化することかと思う（第四節に一部後述）。なお、甲賀本における従者の設定は十把一からげであり、太郎の配下は何人等と記されていないが、伊賀本は夫々に十人ずつ主従合計三十三人と筆が細かい。

#### 四 鬼の岩屋と穴入り

魔王を退治した三郎は、岩屋の中に宝があるとて岩屋に入ると、銀の板の下に深い穴を発見し、最初の穴入に及ぶ。

宝の設定ゆえ聴衆にもいかなる宝と興味があり、恐怖心は無い。穴入の際、心理的には最初が二度目よりも恐怖心は大きい。甲賀本では最初の穴入に妻子への形見を兄二人に次のように託す。

もし穴の底にも入りて、いかなる事に遭いて還らん事もあるとて、肌の守りと肌小袖をは北の方へとつけて給はり候へ、刀は今年四になり候亀一わらはに賜ひ候へとて、したひの形見の物ともを

宝による聴衆への動機づけは甲賀本に無く、さらに従者は物語中より既に消去済みである。伊賀本の最初の穴入であるが、ロープ状の蔓を繋ぎ繋ぎして穴入して陸地に着くと広原に至る。光も差し、道や川あり、橋を渡ると竜宮の如きに至る。「さては、兼家龍宮浄土へ来たたりたるや、一時に四節のていを見る事こそありがたけれ」

と編者が記すように『浦島太郎』の趣向に近似する描写である。東  
 南西北四方の四季、東は春、南は夏、西は秋、北は冬、それぞれ和  
 歌的雰囲気其自然描写を配し、狭義の『御伽草子』二十三編に見う  
 けられる、型にはまり込む類型的描写ながら筆は光明方向に進み、  
 聴衆向けの宝物風の興味に展開している。従って聴衆に恐怖心は生  
 じない。そこには十七八歳の女が金泥の法華経を誦誦し、三郎はも  
 しや龍女かと思う。そこで三郎は女に案内を乞う次第であり、こと  
 はスラスラと進み、猜疑心などを生ずる余地がない。比較のため、  
 甲賀本の対応する条を次に引く。聴衆をドキンとさせる心理的効果  
 の上では甲賀本の方が優れているかと思う。

御経を読み給う、三郎殿はいか様魔縁の物にてそあるらんと  
 て、二尺二寸の劔をさしあて、仰せられけるは、魔縁の物なら  
 はたしかに元の姿になるへし、其儀無くは命をと、めんと給  
 へは、姫君其時仰せられけるは、身つからは魔縁の物にて候は  
 す、日の本の国花の都に

伊賀本では、この姫が、「自らを具足して秋津島へ帰らせ給へ、  
 よくば夫婦と思し召せ、さらずは水主とも思し召せ、甲賀殿、」、  
 妻とも女中とも思い、日本帰国をと三郎に頼むが、「思し召せ」と  
 いう曖昧な条件は実現せず、後、三郎を暗に愚弄する趣きも読み窺  
 われ、編者は三郎と姫とを結婚させない。諏訪上社は男神・下社は  
 女神、夫婦神とは諏訪本地の諸伝本の語る処であるが、この点、伊  
 賀本は珍しい本である（下社は子息小二郎の垂迹とする）。

さて、三郎は「宝をは取り還り給はすして、仏にあらそふ程の女  
 房を具足し給ふ」て地上に引き上げられる。

地上では姫は俄に大事な鏡を穴底に忘れたと悲しむ。いかなる鏡  
 か、鏡のさまが阿弥陀の三尊云々と長文に及ぶ姫の口語りに続けら  
 れる。聴衆に対する心理効果の配慮は甲賀本が優れている。即ち、  
 鏡忘失を嘆く姫に「穴底の住まいが名残惜しいのですか、たやすい

事ですすよ、穴に戻してあげようか」と言い、この文句は滑稽にも効  
 くが、このような滑稽な描写は伊賀本には無い。ただ阿弥陀云々は  
 他にも阿弥陀の現れる箇所があり、編者の位相を推測する一つの手  
 掛かりになるかと思う（阿弥陀と錫杖が注目される）。

こうして三郎は鏡を取りに行く。この二度目の穴入りの際、伊賀  
 本の三郎は兄ならぬ三郎の従者どもに形見を託す。

脇道に入るが姫即ち鏡と判断すれば、表層は地上に上がったかに  
 見えるが、実の処、深層ではさっぱり進展していないことに気がつ  
 く。ことは諏訪上下社の内紛に際するかと思うが、今略す。

さて形見は三郎が地上に戻り得なくなる伏線でもあるが、人情風  
 に可愛い手をしていた子息に、また妻に刀と肌の守りを届けよとて  
 従者に託す。従者にはこう命ずる。

汝ら命を捨てんと思ふべからず、汝ら命を捨つるならば、たれ  
 か宝を届くべき、若松に取らせ、跡を継がせ候へ、人々君臣は  
 三ぜの契りと申せば、来生にて必ず見参に入べし

こうして三郎は再度穴入する。その隙に姫を奪わんとて、太郎は、  
 次郎の反対にも関わらず、綱を切断し、三郎は穴に込められる。次郎  
 は、涙をおさえ、三郎の従者に、こう命ずる。

三郎殿の十人の殿原討死せんと言ひければ、二郎殿我も諸共に  
 いかにもなるべきなれども、三つの宝いたつらになすへき事、  
 三郎殿かたく仰置かれし事なれば、三つの宝確かに届けよとあ  
 りしかは、泣々伊賀に帰りける

## 五 地上の人々

綱切断後、甲賀本は地底の三郎中心に話が進むが、諏方系と伊賀  
 本は一度地上の脇道にそれる。即ち、甲賀本では、穴に閉じ込めら  
 れた三郎は穴いり自殺し、地底国に至り、浅間山頂に穴いでするま

で地底の三郎中心に一直線に話が展開する。

諏方系では地上の話になる。姫を奪った兄は、わが妻にとの要求を容れない姫を殺せと家来に命じ、姫はゆかりの者にその危急を救われ、故郷である大和国春日神社に帰る。其後、穴に残った三郎は云々と記す。(大和帰国は姫の運命の合理化と思うが未詳)

伊賀本も同じく地上の話である。姫は自分の容姿を伏木で女人像に造って太郎に与え、自らは大和国三輪神社に帰る。救出された姫が、物語展開上、早い時点で帰郷する趣向は諏方系・伊賀本ともに一致するが、以下、展開は異なってくる。姫にスカされた太郎はこれを夢にも知らず、帰郷すると新しい女が来たからと本の妻を追い出す。飛鳥川の淵瀬も理り、妻は夫の旅の無事に心を尽くした甲斐もなく云々。「うらより泣々父の宿所」即ち実家に帰る。この辺りは聴衆の同情をさそう条である(太郎の本妻のことは伊賀本以外の諏訪本地に見られない)。さて、太郎がよく見ると例の姫は伏木と化し、加えて弟三郎も穴に失った。太郎は後悔したが遅かった。この辺りには欲が身を滅ぼすとの教訓色が濃厚かと思う。

二郎殿これを見て、あら口惜しや兼すみかしたい申せしもこれそかしとて我宿所へ帰られける、さて兼家が十人の殿原泣々たちに着き、簾中に参り、君は七日路の山にて御隠れ候ぬとてしたいの形見を参らせて広縁に打伏し悲しめは、女房妻戸の際に出で給ひて

以下、若松童が帰らぬ父を慕い、妻は三郎の姿を形代に作り、この木像を若松に与えるが、当初はともかく次第に不満が現れる。

姿は父にてましませども、物を仰せ候はねば、まことの父こそ恋しけれ母御前とて打伏して泣き給へば、何中々に露の命永らへて物思ふこそ悲しけれ(中略)造堂仏事の善根を積む(伏線か)けてうのたちには女房若松そのほか侍共あまたあれば、此世の思ひ出に語りても慰み給ふ、三郎殿は只一人大地の底にこ

められて云々

以上の経過を辿って本筋に戻るが、以上には世話人情の趣きがあり、その描写は写実的である。かかる趣向の背景を考えるに、伊賀本の編者は、原拠本の木像(かたしる)のあり方に疑問を懐いて、これを改めたものであろう。因みに甲賀本の物語後半より形代全文を次に引く。再会後、姫が三郎に身を明かす条の一部である。

太郎殿二郎殿は、わらはを夫妻にせんとし給ひしを、凡夫に契りをごめては神になるまじき程に、又凡夫の思ひをかふりても神に成り難しと思給て、山に入て榎の木を切りて、みつからか顔に作なして、ろたんの魂を入れて太郎殿二郎殿に会はせて候ける也、ひつやうに自に会ふとそ思ひつらん

兄が三郎から奪った姫の其後の運命については定かでない。一部後述するが、古事記所見の弱者的三郎、その古代の記憶を以て勇武の土甲賀三郎を表現し得ないことと同様、姫の運命の記憶もまた表に露わにし辛いことであり、神道集巻四や甲賀本の甲賀館における妻子の夜語り・他からイメージを重ねるの外ない。

榎の木云々は勿論実在ならぬ文芸的虚構であり、書き辛きをかく表現するが、写実の観点からは奇譚と批判せざるを得ない。伊賀本編者はここに疑問を懐き、榎云々を物語後半より抽出・転用して太郎や若松のための形代としたものと判断される。

## 六 地底の旅の諸問題

地獄体験 姫なき地底は今は闇となり、三郎は妻子や二度も助けた兄への思いに嘆く。足のままに歩くと穴を見つけ、「此穴へ逆さまに落ちて死なばや」とて実行に及ぶ。

「すぐ死ぬ」との想いに悠久の時に落ち落ちる。兼家系は苦恐怖の悠久的継続を概念説明ならぬ行動にかく描写するが、落下中、伊

賀本に地獄図が現れる。塞の河原に泣叫ぶ幼き者ども・火焰の中より来よ来よと三郎を招く者・宙を飛ぶ若狭の魔王の首、見るにも心に任せぬ落下ゆえ事問う事もままならず、三郎有縁の罪人どもをよそに遙かに落ち落ちて三郎は陸地即ち維縵国に着地する。

地獄図を語りにかく見せるが、かかる図は甲賀本に無く、落下の色調も異なる。次に引く甲賀本には伊賀本の如き教化色は無く、自殺描写にも拘らず、滑稽味すら窺れる。因みに甲賀本に滑稽は数あるが、その対応箇所、伊賀本の表現は全て真摯である。かかる相違は編者の人柄・聴衆の要求・語りの場の制約に起因するかと思う。

いかなる岩にも落ちあたりて失せんすらんと思ひしに、さはる物無くして幾千万ともなく落ち給ふ、余りに久しく落ちければうつ伏しに成りては落ち、あはなきに成りては落ち給ふ、左右の御手をのへて見給へは、さはる物無し、されは三年三月と言ふなるに、八万地獄に落つるよと思ひ給て、余り久しく落ち給へは、寝いりては落ち、おとろきては落ち落給ふ程に、何所にも落ち着きたりとも命はあらしと思ひ給へは、思ひの外に木葉ましりの砂原に落ち着き給ふ(甲賀本)

伊賀本の地底の旅は、落下地点即ち維縵(縵)国より一直線に故郷へ向かう片道旅行である。この点、地底の最奥国たる維縵国に往き、同国で解脱し(鹿室贅召等三郎昇格の儀)折返し地上へ還る諏方系や甲賀本と明らかに異なる。それゆえ当然乍ら維縵への道行や三郎が神となるに重要な一段階たる解脱は伊賀本に無い。

長文に及ぶ旅の描写を約するに、解脱なき地獄体験の片道旅行、これが伊賀本の特徴である。解脱相当の素材は帰郷一直線の中ほどに言わば給油所風に設置される。言わば給油所における糧食の供与は到達への一手段であり、目的ではない。地底体験を重要と認め乍ら折返し時のピークが伊賀本に無い事実、編者の地底認識の反映と思われ、儀式本位か地獄図か、神道集などとは認識が異なる。

諏訪本地は神仏習合の産物ゆえ、濃淡の差こそあれ、神仏混淆は免れ得ないが、作品内部から伊賀本編者は仏に傾き、阿弥陀尊崇の仏家にして諏訪本社神祇事象にはさしたる関心が無いかと思う。

その片道旅行は、甲賀本の如き叙述を根幹に、これを分散し、諏方系の妻尋ねの諸国遍歴の趣向を参考し、さらに編者の筆とも言うべき悪道の苦を加え、もって一幅の地獄図絵を織りなす。以下、三郎がゆいまん国に着地した条を伊賀本より引く。

出雲国大社の通はせ給ふ維縵国とはこれ也、抑それがし我国へ帰る事あるまじく候やと申せば、汝ついに帰るべし、但し遙かにてあるべし、此国のならひには是を餌食とする也とて、粟の餅粟の飯を賜りけり、次に帰郷葉と申葉をいだして賜ひにけり、扱これより秋津島へはいかにとして帰り候べき、是より東へ千里歩みて国あるべし、それで問ふて行け、承つて東を指して千里行きたれば国あり、これはいづくと問ひ給へば(何くと)の国尋ねが神仏習合の羽黒熊野両権現と無名の明神と都合三つ羅列され、続く国で問うと)根の国とぞ答えける

以下、六道の辻に地藏菩薩より道を教えられ、餓鬼畜生修羅の悪道を通り、ある里で翁に出会い、鹿と鳥を射よと翁即ち鹿島大明神より弓矢を渡される(この給油所で鹿・鳥の殺生をさせる)。

文中、帰るべし云々は、甲賀本には見えぬ結論の先取りであり、物語展開の行末を明確にする。右引用文中の粟と餅、甲賀本では、粟畠の中で維縵の翁に出会い、同じく餅は諏方系における三郎帰国の際の食糧ゆえ、伊賀本は両者折衷の形態である。

もとより出雲の地自体を設定する諏訪本地ではないが、問題は出雲の維縵国と根の国との分散である。出雲は古く秋津島の根の国であり、本来同一と思う。が、それが分散し、これは明らかに本来の形態とは言い得ないと思う。甲賀本より次に引く。

(三郎の問いに維縵国の翁が答えて)此国をは神通の国とも申

維縵國とも申、又底の國とも称(ね)の國とも申也

右の如き詞章を断ち割り、諸國遍歴を補入したかと思う。その際伊賀本では妻も姫も地上に居り、妻尋ねの趣向は不可能ゆえ、妻尋ねから故郷尋ねの趣向に改めたかと思う。伊賀本編者の筆と思われ、三郎帰郷途上の体験図(独自異文)より次に一部引く。

(前略) 餓鬼道へいでにけり、餓鬼ども是やかしこに群がりて水を飲まんとすれば、ほむらとなりて燃えのぼる、我娑婆にありし時、善事を致したらば、かゝる悪所へは墮ちざらまし、善根をちりほども蓄えず、悪ごうは山よりも高く(中略)、次に畜生道へ出られけり、彼の所のあり様を見るに涙もさらにと、まらず、地獄餓鬼畜生三悪道の苦ことさらに悲しかりけり、百千に一つも古郷へ帰るならば、いかにも弔らふべきは三悪道の衆生也、こゝも泣々通り給へば修羅道へぞ出でける(後略)

伊賀本における畜生道は短く抽象的である。その編者は仏家かとは前述したが、例えば源平盛衰記の編者もその内容から仏家かと思うが、船中での女院の醜聞など畜生道を記す。が、何故か伊賀本の編者は性愛には否定的であり、後にも三郎と姫とを結婚させない。この点は注目される。甲賀本所見の、妻と今は三十歳余りの三郎子息の夜語りの削除然り、次に引く畜生の削除また然りである。甲賀本の末尾に荒肌・ぶく・産の三つを挙げるが、服と産は伊賀本の別位置に存在する。伊賀本編者は仏儒に固い。自己の愚を他に露わにし、自身を笑い他を笑わせる(甲賀本)。それを解するかはおき、編者は真摯の人かと思う。甲賀本の畜生を引く。

七月廿五日荒肌を忌みて、我凡夫にてありし時に女のもとへ通ひしに、彼の女い、けるは殿の父御前の我もとへ入らせ給ふ也と語りける、さては親の通はせ給はん親にてこそわたらせ給ふとて、其後通はず、荒肌深く御咎めあるなれ

忌み云々は文法的に零記号の陳述と解する。鹿島神は今後の食に

鹿の焼い皮と鳥を三郎に与え、鹿鳥もまた尽きた里で更なる翁に出会い、翁より三郎宛の姫の手紙を渡される。曰く、

いかに甲賀殿、此程冥土の旅の苦しみ受けさせ給ふ事、いか計り御心苦しくわたらせ給ひ侍らん、さても若狭國七日路の山にて離れ参らせし女房にて候也、甲賀殿は広大慈悲心の人にてましませば、末世の衆生を守らせ奉らんために、わざと鏡をとり落とし、大地の底へくだし奉り、冥土の旅の苦しみを受けさせ参らせ候也、みづからゆへと很めしと思し召し候な、それにわたらせ給ふは、自らがをぢ御前伊勢天照大神にてわたらせ給ふ、詳しく道を問ひ参らせ、秋津島へ帰りて、自らに鏡たび候へ、何事も自らにて申むね候(さても若狭云々は備忘のためか)

と。奥に歌あり、曰く「恋しくば尋ねても来よ大和なる三輪の中川杉のやしるに」と。古今集の本歌からは遠いが、距離的によほど日本に近い場(例の魔物の岩屋近辺か)に手紙を設置する。

伊賀本が綿密な配慮下に編集されたことは本文中の筆から疑い得ないが、姫のおぢをアマテラスとするのは、同神は女性ゆえ配慮不足かと思う(諏訪下社を三郎子息とするのも同様である)。

不徹底ながら、この手紙は過去の記憶を断片的に蘇らせる。書物の文芸は忘却すれば潮つての読み戻しが可能であるが、音声文芸は一瞬のうちに記憶の外に消え去る。忘却は語りの泣所であり、限界である。所々に過去の次第を繰返し語って聴衆の忘却に備える。忘却を手紙に僅かながらも克服するが、一般的に伊賀本の備忘の配慮(途中から聴いて理解可能か)は甲賀本ほどには徹底していない。

さて、物語前半の眼目を挙げるに、甲賀本は娯楽性に傑出し、明るい笑いがある。が、諏方系、ことに神道集には主体的な妻尋ねの長大な詞章に深い悲しみがあり、それは維縵國最奥の鹿室の拝見換言すれば解脱に至り、三郎の穢罪浄化及び昇格となり、後の三郎諏訪神鎮座を招来する。甲賀本はおき、諏方系と伊賀本に注目するに

一は地底に墮ちた主人公が次第に高められる過程を描くが、他は主人公が地底で体験した地獄図を聴衆の前に開陳せんとする。

伊賀本の地底描写は、神祇ならぬ仏教的受動的体験の羅列に過ぎぬかもしれないが、娯楽本位ではなく、宗教的なものであることを、よしそれが庶民教化の目的であれ、確認しておきたい。

地獄図風の説教であれ、ある意味で伊賀本の地底語りは、形こそ違え、唱導文芸的機能を神道集同様果たしていると思う。

協道乍ら語りの外、読み上げ・黙読など享受形態の問題がある。

諏訪本地の後出本の中には部分的乍ら明らかに語りならぬ筆の力の影響を反映した伝本、例えば『室町時代物語集第二』所収の横山重氏所蔵甲賀本など、草子地風の筆に再度穴入する三郎の行動を批判した伝本が存在し、口承と書承の関係が問題となる。

甲賀本はほぼ純然たる口承文芸かと思うが、伊賀本や天正本などにおける口承性と筆の力（書承性）との関連ひいては享受形態は今後なお明らかにせらるべき問題である。

聴衆の興味に重きをおく甲賀本はおき、諏訪本地の眼目は前述の地底体験かと思う。解脱は欠くが伊賀本、それに諏方系、ともにおさえるべき唱導文芸の要点は捉えている観がある。

## 七 甲賀本の和歌導入と伊賀本の和歌移動

地底における和歌の問題 物語の展開上、和歌が現れる位置は互いに異なり、甲賀本では地底の折返し点即ち維縁国に位置し、他方は日本ま近の場所である。甲賀本では、帰国の際に翁が姪宛の手紙を三郎に託し、姪宛ゆえ内容を知る由もないが、伊賀本では、前に引用（第六節）した、明らかに姫の手になる三郎宛の手紙である。甲賀本より次に引く。手紙の中は僅かに歌一首であるが、誰が詠んだのか、古今の和歌注釈書の転用かと思うが、問題となる。

（翁が姪宛の手紙を）書き給ひぬ「恋しくはとひても来ませ大和なる三輪の山本杉たてる門」と書きて三郎殿に参らせ給ふ、確かにおさめ給ひけり、三郎殿老翁に（暇乞して出発）

これは招きの歌であるが、翁の詠んだ歌としては奇妙である。その内容から姪を地底に招くのではなく、また、翁が三輪にいるわけでもない。別に述べ一部後述するが、要するに原拠本をもとに甲賀本編者が改作する際、地上の男女二者間の歌を地底の男翁女三者間の歌として転用した不完全性がここに残存しているのである。

即ち神道集など諏方系に三郎の第二の妻とも言うべき女（維縁国の老国王の乙娘）が現れるが、この女に格別の働きはない。地底で三郎に契りを結び、後、三郎の跡を慕って地上に至り、浅間権現と現れた。これが女の殆どである。

この地底の奇譚を甲賀本編者は改め、この女を、地上に引上げて甲賀の女房として世話人情風に写實的に描き、活躍させ、言わば女の残滓として維縁国に手紙を設定したのだが、趣向の変更は招きの歌を使用したため、前述の不完全性がやはり残った。二者（男女）間の招きの歌に招く立場にない第三者が介入しているのである。

伊賀本編者は、この不完全性・動機換言すれば三郎の旅の無目的性・兄の館における姫の処遇の問題などを顧慮し、その克服を試みた。それはかなり成功するが、新たに問題も生じ、「三輪の中川」の手紙は、後述のように充分機能しない（手紙が二通必要）。

まず伊賀本の動機の問題から考える。聴衆の興味をひく動機づけであるが、第一に甲賀本同様物語冒頭に海山の魔物論議を置く。当然、聴衆はいかなる魔物と興味をもつ。魔物退治の後、第二の動機は宝物である。比較のため、素朴と思われる甲賀本の本文をまず引き、次に伊賀本を引く。一部前述したが、伊賀本によれば、いかなる宝と動機づけられ、穴入りにも恐怖心を聴衆に生じさせない。

○（鬼の岩屋入り）これは鬼輪王の休みたる所と見えたり、歩み

の板三枚敷きたる所あり、あやしと思ひて板をあけて見給へは（きわもなく深い穴を発見する。最初の穴入に際し、妻子への形見を兄に託す。）

○鬼王はひぎやうの宝をもつと承る、打出の小槌隠れ簀隠れ笠自在の袋といふ物、さだめて岩屋の奥に置きてぞ候らん、見候はんとて岩屋の奥へ（中略）、奥を見たまへば、しろがねのまな板三枚並べて敷いたり、宝は板の下にぞあるらんと

宝ならぬ姫を救い、聴衆の興味は変更される。以下、兄が裏切つて姫を連れ帰り、一方、三郎は冥土の地獄体験をするが、この地底部分を甲賀本と比較すると、伊賀本の描写は綿密である。

更に原拠本の弱点を克服する意図も窺われる。ちなみに弱点とは地底における主人公三郎の行動目標が無いことである。

甲賀本の場合、魔物は地上で退治済み、妻子は郷里に滞在し、姫も横取りされ、残された三郎は簡単に穴入り自殺を企て、落下後、地の底に着き、フラフラと目的も無く歩くと直ちに粟畠の中で維縵国の翁に遭遇し、帰国の際にも何ゆえの姫宛の手紙なのか不明であり、トボトボ帰国せざるを得ない。かかる次第であり、三郎の行動の動機が弱い。

主体的な行動目標が無い点は甲賀伊賀両本同一であるが、甲賀本との比較上、受動的体験乍ら地獄図を聴衆に見せんと伊賀本編者の意図が窺われる。更によほど日本に近くなった地底の場所において、何もかも三郎を神とするための方便との姫の手紙を翁より示されて勇気づけられる。これが第三の動機である。

以上の如く伊賀本は、動機の連続性において優れた編集をみせるが、それは完全ではないようである。俗にあら立てれば云々と言うが、こちらを改善したため、新たに問題が生じ、双方を満足させる物語構想に至らず、この点批判せざるを得ない。即ち、督促状ではないのだから、手紙は物語中に一回で有効に機能すれば良い。と

ころが三輪の中川の手紙は有効に機能していない。

甲賀本では、郷里甲賀に帰り、三郎は姫に鏡と翁の手紙を渡す。手紙を読んだ姫は鏡を空に投げると竜が現われ、三輪においてませとの言葉で三郎に残して、姫は竜に乗り三輪神社に帰る。手紙は一回で有効に機能している。鏡もまた然りである。

伊賀本では、郷里における妻子との再会の喜びと、聴衆に対する三郎の過去の体験の説法とに筆がさかれ、加えて姫は、穴より救出後、早々と三輪に帰ったので三郎に対面する場が無いのである。そこで今度は三輪の姫より「督促状」が届く。伊賀本を引く。

（三郎による過去の体験の説法・兄二人の相対死・兄の死を）嘆きたまへども甲斐も無し、然るに天より文一つふりたり、開きて御らんずれば、杉大明神よりの文なり（もとの妻と一所に住んではいけない、九月五日の祭の日に三輪社へ、鏡を云々）

伊賀本では前に励ましの手紙として写実的に設定したが、ここでは空から手紙が降り云々と奇譚で無造作に処理し、結局、物語を無理やり連続させるために二通の手紙を設定するのである。つぎはぎ的矛盾が露呈し、委細は略すが鏡もまた有効に機能していない。

協道の論ながら、一部は前述したが、諏訪社の古い何かの事件では、撰集抄の嚴島の女神の鏡に類例が見えるように、諏訪の、恐らく男宮ならぬ女宮のイメージがこの鏡であり、これを敵対勢力換言すれば魔王に奪われ、女宮が鬼と一緒に住む事態があったように推測するが、それは甲賀伊賀両本とも兄のイメージに醜化されている立場を異にすれば三郎が鬼にもなる。語り辛い処である。

伊賀本におけるかかる問題の原因は、兄が横取りした姫のその後の処置にある。甲賀本はそれを奇譚として醜化するが、古く本つ国において兄と姫が結婚したか否かにかかる。それは語りたくない、主人公三郎が実は弱者であったと語りえないことと同様に。この三角関係を分解して、性愛には何故か否定的だが、姫と三郎を結婚さ

せず、大局的に別々の神社に垂迹させる方向に伊賀本編者の筆が向かったので、かかる結果を招いたことと思うのである。

甲賀本では、物語後半、甲賀における再会の際に、姫は「私のかたちを木像に作り、それを兄にあてがっておきました。私と契られたとお思いの事でしょう」と三郎に言う。つまり姫は兄をコケにしたが、それで姫は甲賀の何処に居たか、構想上、疑問が残り、なお奇譚とも言うべき被写実的なものが残存している。

この曖昧な点に疑問を懐き、これを伊賀本編者は克服せんと試みたが、結果は不完全であった。諏方系の物語展開の影響もあると思うが、コケの条を物語前半即ち三郎との対面なきまま前半に説教化し、姫と兄の問題であったコケを増幅・拡張して本妻や弟にまで及ぼし、欲望ゆえに太郎は眷族を失った、即ち奪った姫と思つたのは只の木切れに化し（姫は太郎をコケにして三輪に戻る、微視的には三郎すらコケにする趣きが窺れるが略す）、新妻ゆえに古女房は出て行けと追出した太郎は妻も弟も失う次第であり、諏訪本地の本筋を逸脱して、欲が身を滅ぼすと説教する方向に物語が変容する趣きがあり、一般的に伊賀本には勧善懲悪風の教訓色が濃く現れる。

#### 八 浅間山より郷里へ帰る旅路

地底より日本に着いた三郎は現在の場所（実は軽井沢近辺、信州浅間山なぎの松原）が分からない。山中休暇の条を次に引く。

甲賀二十三と申せし三月中旬にけてうのたちを出でさせ給ひて国々を回り、三とせと申せし七月廿日、若狭の七日路の山にて鬼王を滅ぼし、同じく廿五日に大地の底に墮ちられしより此かた、三十よ年が間、そこはくの苦しみを休まんと申し召し、木の根を枕とし給ひて前後をわかまへず、十五日が間、ふし給ひけり（郷里に直行せず休む点、諏方系の影響であると思う。）

右には備忘の配慮がある。枕は山伏の行儀の反映か。三十よ年は忌・観音の三十三かと思うが、三郎は時の経過を後に知るので、やや重複気味ながら、慣用句風に「みとせが間」とでも記して漠然とさせるべき処かと思う。

場所を尋ねる条を伊賀本より次に引く。【括弧】部分は、昔、寺社造立に募金の如きを募るも三郎の協力なく、ために今、場所の示教無しと因果を含む。ここは抜差し可能な切継ぎ増補、視点を換えれば即興語りとも言うべき部分かと思う。

問はばやと思し召しける処に【馬をおひて人二人来たりけるに物申さんとの給へば、何事ぞと応ふ、これは秋津島にて候か、又いづくと申所にて候や詳しく道教えてたび候へとの給へば、此人大きに怒つて、それほど知らざる道を行くか、知らずば十年も二十年もそこに立てとぞ吐りける、これは凡夫にてましまさず羽黒権現にてわたらせ給ひける、三郎殿過去の時、権現も凡夫にてわたらせ給ひしが、御堂を造らんとて勳進をし回り給ひけるに、甲賀其時結縁に入給はざりし間、権現憎しと思召し只今現れて荒けなき返事し給ふ、又【牛をおひてまします人に遭ひて、是はいづくと申所にて候や、教へ給へと仰せければ、哥にて返事をし給ふ、知ずやは尋ねてもとへ信濃なる浅間云々

甲賀本に【括弧】部分は無く、それを削除した本文形態である。牛追う塩商人二人に尋ねると、年下が色をも香をも知る人ぞ知るとて理は無いと阿呆扱いすると、年上が色をも香をも知る人ぞ知るとてなぎの松原と教える。今日の月日を探ね、同様に六月一日と知る。場と時と滑稽が重なる笑いを誘う語りは伊賀本に無く、怒りの語が現れ、編者に役小角の前鬼後鬼もしくは不動明王の面を見る。

甲賀本は、姫の語りに牛商人を実は鹿島明神であったと後に種明かしするが、伊賀本はそれを善光寺の如来と直ちに語る。牛と善光寺と何か引かれる。聴衆にはなぜ鹿島明神か不明であるが、牛追う

人を善光寺とすればイメージとして何か得心する。諺の流布が前提となるが、伊賀本編者は鹿島を耳近い善光寺に変更したかと思うが確証はない。【括弧】部が無く、牛を馬とする兼家の子孫の望月善吉氏③所蔵甲賀本もあるが、名詞の入替えと思われる、今略す。

○近江国にそ急がれける、漸く日数積もりしかば、同じき月の十六日の夜半ばかりに近江国甲賀のたちに着き給ふ（甲賀本）  
郷里に急ぐ甲賀本の描写はかく短いが、伊賀本は宿泊を記す。

○牛追ひたる人はいぬるを指して行き給ふ、是凡夫にてましまさず、善光寺の如来にてわたらせ給ひける、行別れまします所とて、今におゐて、かの所を追分と名付けたり、原を通りて伏屋に着き給ふ、ある小家に宿を借らせ云々

小家よりぶく七十五日ゆえ宿を貸さぬと追出され、次の家は御産三十七日だが貸すとて、帰郷の道中、三郎は一夜の宿を借る。

甲賀本末尾に諏訪信心に荒肌と服の忌み、それに御産の許しを羅列する。伊賀本編者は荒肌（第六節前述）を削除し、服と産を帰郷の旅路に繰上げたものと思う。こうして三郎は故郷伊賀へ帰る。

### 九 三郎に対する郷里の人々の処遇

帰宅を告げるが返事がない。内に、今年は古殿お隠れより三十三年と奴婢が語り合うが、返事はなく、声が内に伝わらぬが姿でも変わったか、夜間の人騒がせも憚られ、明日更めてと一人広縁に臥す。朝、蛇が居ると人々が苛むが、三郎は動かない。

今は三十七歳の大殿に蛇の処分を告げると、母は古殿三十三年ゆえ殺生不可と子息を戒める。小二郎は蛇に「殺す処だが戒めゆえ許す、出て行け」と言う。いっそ子の手にとと思うが、それでは子があゝの世で五逆罪の苦を受けようとて、女房を一目と思いつつ館を泣々去って、けてうの中嶋の薄の中に雨風にうたれ

三月より七月まで隠れ忍ぶ。（伊賀本の梗概）

帰郷後、直きの帰宅を人情の常とすれば、右の展開は滑らかであるが、次に引く甲賀本では何故か三郎は自宅に入ろうとせず、今は三十八歳の子息が「いつ父に別れたか」と夜語り母に問う設定とでも不自然である。

館に着き給ふ、南面の広縁にのほり給ふて、妻戸を打叩き名のらはやとは思へとも、人まことに思はしと思しつめて、明くるを遅しと待ち給ふ心のうち言ふ計なし（内には妻子の夜語りに、子息小太郎が父帰るの夢を見、罪深き迷いか、供養には心を尽くし云々と母に語り、母は吾殿四歳の時、海山の論議云々と語る。闇に忍び聴く三郎は事の次第と時の経過を知る。明朝、奴婢が蛇を発見して苛み、館を追われる。）

人々が三郎を苛む点は甲賀伊賀両本同一であるが、苛みの後に子息が父とも知らぬ蛇を許す趣向と、子息にも会わず奴婢より追われ更に奴婢の子供達からも路上に苛まれる趣向とでは効果が異なる。

かく趣向を異にする原因は、編者の意向は勿論ゆえ、それは別に社会情勢の変化が考えられよう。家中侵入の蛇の一件として巧みに写実する点、伊賀本に長がある。が、それは子息を現在の家長とする一家内の儒仏的平和的処理である。太平記の骨肉あい食む離合集散とも言うべき中世の下克上の雰囲気をとどめる点、甲賀本に長がある。敗軍に主君を失った離散者像もしくは戦後帰国したら妻は某と結婚していた、御家騒動その他のイメージにも通う。

（童共）人蛇にてあるぞやとて申て打ちける、三郎殿仰られけるは我は己れらか先祖のしうにてあるそやいかに（甲賀本）  
三郎が家屋に入り得ない事情も、「殿の父も私のもとに入らせ」云々同様、語り難いある事柄に起因するものと思う。

伊賀本は諏訪の古代中代の事情をよそに写実的にかく描く。それは、動乱を経た平和の時代、安定した近世前後の産物かと思うが、

と言つても室町末期もしくは近世初期のある種の古浄瑠璃の如きジメツと暗く抒情する語りの文芸とはやや異なる観がある。

さて、甲賀本における妻子は三郎の脱蛇に何ら働かわけではなく前述のようにただ夢見に云々とするにとどまる。甲賀本を引く。

此世になき人の罪の深きにこそ親子親類の夢に弔はれんとて見え候なれ、御罪の深くましまし候やらん、御孝養は心の及び候程に仕て候へは、さりとともこそ思ひ参らせ候へとて、御涙を流し給ふて南無阿弥陀仏と申して父御前の御ために回向し給へり母御前是を聞き給ふて仰られけるは、殿の四つになりし時、兄御前の海と山と

この対応部分は伊賀本に特筆大書せられ、子息が父三十三年忌の仏事を母に提案し、母もこれに同意して盛大なる仏事が営まれる。

### 十一 三郎蛇身を脱し説法す

館を追われた三郎は御堂の下に隠れる。堂上では僧達が徒然に物語りする。それを密かに聴き脱蛇の法を知る（諏方系・甲賀本）。

伊賀本では、子息小二郎が僧侶多数を招き、三郎三十三年忌の仏事を盛大に営む。実際にあった事と思うが聴聞に公卿殿上人以下四方の人々が伊賀に参集する。聴聞のため、けてうのぬまはたを通る妻子太郎次郎など、三郎は薄の原より首を出し、彼等を複雑な思いに見送り、夜、人目を忍び聴聞する。結願の日、小二郎は、僧に「弥陀を唱えれば無量の罪は消えて極楽に往くが、定めて父は蛇道の苦あらん、錫杖にてお弔いを」と願い、僧が手執錫杖云々と誦すと、三郎天にもあがる心地がし、続く条に仏の功力が現れる。

百八煩惱発菩提心と読みはんべれば、身をくつとのべ給ひ、此程冥夜に迷ひし心地うせ、思ひもより給はざるに、只今の錫杖の功力にや、杉の大明神の御おぢにたまはしますとかや、伊勢大

神宮より五つの小袖を賜りしが、もし其衣装のわざにもあるらん、脱ぎて見ばや（脱ぐと衣は蛇と化し去り、人身に復す）

伊賀本では法力ゆえにか自発的に脱蛇の法を知る。それを僧の雑談に知る設定ではなく、三郎自身会得する点が注意されるが、もとより実在として地下に往った者が蘇生する道理はない。その配慮。

さては衣装のわざなるよと思ひ、左の脇に挟みたる鏡をとり出し、顔にあて、御覧すれば、廿三の御年、たちを出られし時の御齡未だ年は少しもより給はずして、色あひ煌々と見え給ふ、余り嬉しさに、そのまゝ広縁にあがらせ給ふ、（妻子に善根の功力に蛇身を脱したと言ひ、人々は夢か現かと驚く。衣装を着て、再会の喜びに涙し、公卿殿上人当国他国の人々も涙する）

編集上、兼家本の夢見の夜語りと僧の雑談を合わせて、夢見を現実の法要に転じた趣向である。仏教の力を前面に出す。鏡を見ると二十三の時の顔云々というが、現在、子息が三十七歳であれ、故父は廿三の姿に時間が停止し、姫の鏡を実用的に借用し、法要における故人の面影を彷彿させる点では巧みな設定ではある。

しかし、裸のまま広縁に上がる設定は拙い。他の諏訪本地では脱蛇の後、僧より衣類を貰って妻子との対面に及ぶので、ここは仏事の特筆大書したツケが裸の広縁に波及したものと考えられる。

さて御僧達も不思議に思ひ召しける、皆々御座をさつと立たせ給ひ、これへと請じ参らせ給ふ、さて三郎殿高座にのぼらせ給ひて、かねうち鳴らし、此ほどの冥土の苦しみを御説法にぞあそばしける。諸人聞こし召され候へ、天がしたに女人多しと申とも、夫のために孝養のこゝろざし深きは、甲賀の女房にしくはなし、親のために孝行の心ふかき人は甲賀のかねしげにてとゞたり、（中略 故郷出發このかた現在に至る経過を語る。公卿達は三郎を拜して家に帰る。）そのころ五畿七道の物語、是よりほかのことはなし

## 十一 後日譚と垂迹譚

伊賀本編者は、作品前半の山場を地獄体験に、後半のそれを供養説法に置いたものと判断され、仏事の説法の後、気が緩んだか、仏本位で神語りに興味が無かったのか、綿密な編集の筆は、後日譚では粗くなっている。前節に引用した直後を次に引く。

さて太郎殿二郎殿は中々に三郎どの、手にかゝらんよりはとて、北山に入さしちがへて空しくなり給ふ、人々此由申されたりければ、(中略 三郎は)嘆き給へども甲斐もなし、しかるに天より文一つ降りたり、(中略 姫からの手紙)「いかに甲賀殿、この程の冥土の苦しみ、さこそ御わたり候らめ、女房昔の婦妻也とも一所に住まひ給ふべからず、精進あつて垂迹に現れ、共に衆生を護らせ給ふべく候、九月五日は杉の祭にて候、同じくは祭の日参らせ給ひて、鏡をもみづからにたび候へ、何事をも自らにて申べきむね候」とてあそばしける、さてはとて、女房は精進して暇申、熊野参詣とげられけり、

文中の人々云々は三郎を善人として合理化したものであろう、甲賀本では、三郎は怨み言を述べんとて武装して兄の館に押寄せ、結果、二人が死ぬ設定ゆえ。手紙の天降りが奇怪にして姑息な趣向であること、前述したが、夫婦別れせよとの絶対的発言もまた、三郎の説法における孝婦的顕彰を顧慮すれば、何故なのか納得が得られず、姑息である。この手紙に対応する部分、甲賀本では姫の語りによる聴衆への備忘を兼ねた要約的繰返しが現れる。即ち、過去の粗筋を語りつつ件の登場人物は実は何々明神であったと種明かしする部分である。この繰返しは、伊賀本では三郎の説法に役を譲り、種明かしは主として三郎の旅の中に分散配置されていると思う。

続いて、九月五日、三郎は杉のやしろの祭に参り、宝殿の内より姫が三郎を招く。この杉社は大和の三輪神社そのものよりも寧ろ甲

賀伊賀地方における三輪の分社と考えられ、この点、福田 晃氏(5)に示唆深い考察がある。

さて三郎殿は御宝殿に参り給へば、御鏡を明神ちきにめされけり、三日は物がたりあつて大ききをつかはし、六十余州の神祇みやうだうをしやうじまいらせ給ふ、三日御せんぎ有りけり、今は越後信濃上野此三が国に荒人神ましまさずして、衆生悪魔に悩まざる、間、面々にくだり給ひて、荒人神となり、衆生をまぼらせ給へ、大明神は越後の国へくだり(後略)

以下、各々の垂迹先などをまとめてみる。

1 大明神 越後国さうわう権現 本地を記さず

2 三郎の女房 上野国一宮 本地を記さず

3 三郎 信濃国諏訪上社 本地は普賢菩薩

4 小二郎 信濃国諏訪下社(下のみさ山) 本地は観音

この中、1は管見では他の諏訪本地に見えず、2の上野は諏方系にも見えるが女房との連絡は未詳であり、3は通説通り。4は1同様他に見えず、下社に子息をあて、また3男主人公と1女主人公が別居している点は珍しい。その理由は未詳である。甲賀本における甲賀の子息の位置については別に述べたが、伊賀本における子息が太郎次郎と等価であると仮定すれば、表現が不適切かも知れないが、小二郎を下社に追いやった事情もほぼ推測がつくが、今そのことに立ち入らない。伊賀などの分社ではともかく、信濃現地では容認しえない説かと思う。

以下、諏訪を信仰すべき旨ふれて、兄達の垂迹に及ぶ。

甲賀の太郎殿二郎殿無間地獄に墮ち給ひけるを、三郎殿梵天帝釈に申させ給ひて、「二人の兄は、自らがためには善知識也、然るべくは、むげんのごうを助けて、垂迹になしてたび給へ、我も共に衆生をまぼり候はん」と申させ給ふによつて、地獄よりめし出されて、伊賀の国二所の宮と現れ給ふ、

前には長兄の悪行を諫める次兄として描き分けたが、ここでは稍粗く一括している。描き分けは諏方系の、故郷に垂迹したのは甲賀本の影響であろう。また嘆願は伊賀本編者の筆かと思う。

物語全体として、三郎は、冥土の地獄体験の結果、諏訪神として垂迹するに至るが、その一部として、兄達は、同じ体験の結果、伊賀国の神として垂迹する。即ち三郎と兄の事蹟は、規模こそ違え、相似形をなし、方便ゆえに兄を悪とせず合理化し、結果として『三諏訪本地』とも言うべき伊賀の本地の物語になっていることを指摘しておきたい。編者の腹つもりとして梵天云々のこの辺りで物語を結ぶ心算であったかと思われ、この後はごく簡単に済ませて物語大尾を括る。即ち七月廿七日の諏訪の祭と社を薄で飾る由来、狩猟などに短く触れ、所謂「諏訪の許し」（殺生肉食の合理化）の四句を引き、これを解釈する。鳥獣は仏に遠いが人の身に入れば仏果を得る、と。しかし、編者は仏家ゆえにか、次の傍線部、殺生の否定も見え、矛盾がある。また、唐土天竺云々は諏方系や甲賀本の末尾における大陸行きの削除・改変とも思うが未詳である。

人の身にやどれば、おなじきぶつくわをせうすと成り、小鳥の  
 一つをも殺す事なかれ、神は本地をあらはし奉れば、五すい三  
 ねつの苦しみをのがれさせ給ふなり、諏訪の大明神の御事、日  
 本第一のふしぎ也、唐土天竺にもかゝるるためしは有るべからず  
 此草子をよみ奉れば、我本地を現わすとて、明神来臨ましまし  
 て、現世安穩後生善所とまばらせ給ふなり（作品大尾）

## 結語

以上、概ね物語展開に即して伊賀本に所見する個々の問題を見てきたが、それら個別の特性については省略する。  
 いったい、この種の本地物語の基本構造形式が本地譚と垂迹譚の

結合より成ること、また、内容上、前者で神の前世即ち人間としての主人公の苦難修行の事蹟が語られ、後者で主人公が庶民救済の神として現世に垂迹鎮座する次第を語ることに、これら本地物の一般的形式を前提とするならば、伊賀本における本地譚と垂迹譚の境界即ち接合部分がまず問題となる（形式上のさらに細かい問題、例えば垂迹的結論の一部を物語冒頭におく例など、細部は今おく）。

伊賀本のそれは諏方系の『諏訪本地』や甲賀本のように明瞭ではなく、いくつかの問題が存在する。（故郷肯定は甲賀本にもある）まず、苦難を受けた前世の地の否定の要素であるが、例えば前世物語の場を唐土天竺に求める熊野本地や厳島本地では、彼の地を離れて（甲賀本の冒頭にその片鱗が見えるように）日本に渡って紀州なり芸州なりに垂迹するように、諏方系や甲賀本もそうした本地物のながれを汲み、古い縁故の地を離れ、大和国を離れて海彼の地に渡って信州に迹を垂れるわけである。例えば①諏方系の場合、大和国に再会した三郎と姫の夫婦神は故郷甲賀に帰って垂迹して目出度しと大尾を括っても良い筈であるが、それは「兄に仇まれた地」として明確に否定され、結局、信州鎮座に至る。②甲賀本の場合には別に述べたが語りの管理者の位相の問題がからみ、事情はやや複雑になるが、ともかく甲賀の地に三郎直系の子息を残す設定下（甲賀三郎の子孫と称し、甲賀を拠点に諏訪本地を語る人々の存在理由・合理化・肯定）に諏方系同様、天竺を経て夫婦神は信州に至る。

甲賀本にやや露わとなった否定の理由の問題が③伊賀本では顕在化する。本地譚に伊賀本編者が強調した地獄体験が信州垂迹の原因とは容易に判断されるが、杉の社を離れ、（天竺を経ないが）姫と妻に別れて三郎父子が信州に垂迹した理由は明らかでない。

本地・垂迹両部分の境界に転ずるに、その境界は①大和離れ・②大和離れ（もしくは、読み方次第であるが、大和三輪で三郎が姫に契りをこめて神となった時点）とほぼ明らかであるが、③伊賀本の

場合には境界が明瞭でない。後述の兄達の垂迹の問題にも関係するが強い区切れば、前掲引用本文中、杉社入り後の「三日せんぎ」を以て区切るべきであろう。忍者的合議、甲賀中忍の会議の如きを以て三郎の諏訪垂迹が決定され、そこには熊野叡島以来の自発的故郷否定の要素は見られない（編者が仏教的な山場に力を入れ、垂迹部辺りにはさほど関心がなく、これらを抜いて物語の前方に繰上げ編集したことも一応考慮されるべきではあるが）。

最後に『志奈乃、諏訪の神傳』の読みに関わるが、前に伊賀本編者が、兄と三郎を描き分けていることを指摘し（言わば頼朝と義経の関係か）、兄の所業は三郎を神とする方便と合理化する点に注目した。建前として信州鎮座の三郎の事蹟を終始語りねばならないのであるが、前に相似形云々と述べたように三郎の地獄体験は即ち兄のそれであった。

（兄は）地獄よりめし出されて伊賀の国二所の宮と現れ給ふ

建前の上で信濃の諏訪神の由来を語るが、冒頭に当国云々と述べたが如く、それが故郷伊賀の社の肯定に重なっていることを指摘しておきたい。換言すれば本音の上で兄が物語の結論となり、主人公の事蹟を終始語り通すという本来の純粹の本地物としては稍外れた形になっていると思う。委細は別に、これは甲賀本の子息小太郎にも通う。本地物文芸の発生・盛行・終焉という歴史的経過、即ち文学史的観点からは、例えば笑いに満ちた横着者の夢物語ともいふべき物くさ太郎ほど極端ではないにせよ、伊賀本はやや新しいかと思う。しかし、本地物逸脱終焉や仏教偏向はおき、綿密な配慮の下、唱導文芸、語りによって人々を導く文芸として（聴衆の興味本位の甲賀本や、細かには伊賀本の副次的諸要素の繰上げ・削除等の難点はおき）、伊賀本は神道集にも通う真摯な在り方に復していると高く評価せざるを得ないであろう。

## 註

- (1) 拙稿「語り物としての諏訪本地」（和泉書院『継承と展開』所収）
- (2) 徳田和夫「お伽草子 研究」に括弧部分に関して別に示唆深い御指摘がある（同書一四二頁）。
- (3) 福田 晃翻刻・解題「諏訪の本地」（『伝承文学研究』第2号所収資料篇）解題によれば所感者は甲賀在住の由。
- (4) 拙稿「諏訪本地の諸問題」（宮崎大学教育学部紀要第70号）
- (5) 当該作品成立の背後に例えば吉田兼右・兼見など公卿の関与が想像される。この点、本稿序前掲『志奈乃、諏訪の神傳』解題（臼田甚五郎）・福田 晃「甲賀三郎の後胤（下）」（国学院雑誌第63巻）・徳田和夫註（2）前掲書（第三篇第三章）参照
- (6) 二所宮については註（5）福田論文第26頁以下参照
- (7) 松本隆信「中世における本地物の研究（三）」（『斯道文庫論集13』の学思に負うところが大きい）
- (8) 本稿に直接関らぬが、小松和彦「神々の精神史」所収の物くさ太郎論を一読して感じたことであるが、本稿にも見た甲賀本の滑稽味であるが、これは一義的には聴き手への配慮かと思われ、作者自身向きあう内面世界とは異なるかと思う。比喩的には業とオブラートの如き関係かと思う。笑いや滑稽という表層の奥に存在する本質が重要であり、それには、発生盛行終焉、文学の史的理解が必要であろう。甲賀本は場面場面の心理的配慮に傾き、作品の動機が途切れがちであり主題が山場として結晶しない憾みがある。また、神道集の語りが感動深く享受されるには法要の儀式同様の厳かさを要し、それは人々を固縛しがちな面を有する（場の制約）。甲賀本は、聴取参加者の進退自由、途中からの聴取者に対しても概略の理解容易な作品形態になっているかと思う。